

## 鼎 談 “地方の作品”が呼び起こす 近代建築の失われしもの

出 席

宮本忠長 (宮本忠長建築設計事務所所長)

阪田誠造 (坂倉建築研究所代表)

小堀美津子 (建築画報社会長)

### ■ 地域との強い密着が感じられる宮本作品

**本誌** 先頃一応の完成をみた「小布施町並修景計画」でもわかるように、宮本さんのお仕事は、単に町並を再生するというだけでなく、そこに息づいている文化的原風景を見極め、時間をかけてたしかな手応えを得てから仕事に取り組んでいるように感じるのですが……。

**阪田** そうですね。宮本さんは、長野を中心に密度の高い仕事をしておられるということだけではなく、そのなかに、いろいろと近代建築が標榜してきたことに対する一つの修正、あるいは教訓を示されているのではないかと、思うのです。建築は、土地に結びついてつくられる。そのとらえ方が、近代建築思想のもとでは、標準化だとか、抽象化だとかのために、どんな場所でも同じようにつくることを一つの目標とした時期があったと思います。その結果、全国津々浦々、同じような「××会館」ができてしまって、住民から批判されるような事態を招いてしまいました。

その点、宮本さんのつくり方というのは、この逆ルートを早い時期から自ら切り開いてこられたというべきです。祖父の代からの建築的地縁、人縁の地に再び帰り住まわれ、自身の地域での生活を通しての建築づくりを感じさせるものがある。同地域の施主の要望は、自然に共感をもって取り入れられ、施主と心底から一体となり得て、建築づくりの諸条件をキメ細かく拾い上げながらつくっていく。まさに、地域に密着したつくり方なのですね。当たり前かもしれませんが、なかなかできることではなく、それが信頼を得てつくる建築のつくり方の本道だと思います。現代においては、それはレアケースであり、宮本さんの建築をつ

くる姿勢は、今日の心なき建築家たちに対しての身をもって示す批判をなしている部分があると思うのです。同時に、新しい造形についても、宮本さんなりの苦闘の積み重ねがあるし、それらが全体に作品に表われ、今日の宮本さんに対する高い評価につながっているという気がするわけです。

**本誌** 取材に伺ったときに痛切に感じたことは、どの建築をとり上げて、お施主さんが大変満足しているということですね。小布施堂で話をうかがっても、「最高の建築だと思えます」という答が返ってくるし、市村公平さんのお宅を訪問すると、市村さんのお爺さまが、「皆さんが、この住宅はとてもいいといって褒めてくれるし、私も本当にそう思います。とにかく先生は、私の話をジックリと聞いてくれましたからネ」といって、まるで一家団らんのような雰囲気になってしまう。これは宮本さんの人柄のせいでもあるんでしょうが、それよりも何よりも、基本的なコミュニケーションが実によくなされたんだなァ、ということが実感としてこちらに伝わってくるんです。

**阪田** 小布施堂の向かい側に竹風堂というのがありますが、あれは昔からあったんですか。

**宮本** 竹風堂さんの店舗は、ほぼ15年前ぐらいでしょうか。たまたま、新潟県のほうから古い民家を移築されまして、栗の木を3本植えて、その民家を上手に生かして、お店にされたんです。

**阪田** あれはどういう人が設計されたんですか。

**宮本** 名前は忘れましたが、東京の建築家らしいですね。

**阪田** 全体については多少宮本さんが調整した面もあるんですか。

**宮本** 竹風堂さんとは僕は全然関係ないんです。

**阪田** なぜ宮本さんがやらないのかというふうにちょっと



宮本忠長氏

考えちゃうんだけど……。

**宮本** それは、地域でお互いに企業が競争しているところがありますから……。

**阪田** そちらへは宮本さんはなかなか読みが深いというか、節度があるというか……。

**宮本** 竹風堂、桜井甘精堂、それと小布施堂という3大メーカーがあって、実は個人的には私はみんな親しいんですが、田舎にいますと、建築の設計者というのは、わりあいと、企業なら企業の、特に商業建築の場合などは、CIとかいろいろな企業戦略のなかまで入っていくわけですから、どうしても、不見転芸者みたいにあれもやるこれもやるというと、施主の信頼をどこかで失いますよね。だから、そういう意味では、少し古い考えかもしれないんですが、同じ地区では1企業と1建築家がずっと結びつくという関係が、大事じゃないかと思っているんです。

**阪田** それは地方に限らない問題ですね。競争相手のところと同種の建物を、同じ建築家が双方ともに設計するとすると、設計者の立場上、向こうよりもこっちがよくなっちゃったというのもまずいし、それだけじゃなくて、おっしゃるようなあらゆる内部事情にも通じることになるわけですから、信頼関係がまたややこしくなる。私はこっちの会社、あるいは個人の建築の設計をお引き受けしているから、あっちをやりたくてもできない、というのが信用の基本だと思う。こういう姿勢は大事にしないとイケないでしょうね。

それと、ひとつ羨ましいなと思ったのは、小布施町の公共建築は、宮本さんが何年にもわたってひとりで全部の設計をやっている。これは、建築家にとっても、発注管理をするお役所の人たちにとっても、問題が継続的に経験の中に積み重ねられていくことのメリットがあるはずですよ。普通、そういうことをやると、なんか、トップと建築家が特別の関係があるのじゃないかとか、つまらないことを詮索されることが多いし、機会均等とかで、やりたくとも、また、やらせたくとも、封じられてしまうことになるようですよ。

**宮本** おもしろいことがあったんです。町長選挙のときに、反対派の人が、癒着だというんですよ。そうしたら、町長いわく、「建築家というのは町長の女房だ」と。町の施設を考えていくうえで、女房関係ぐらいの人じゃないとダメだというんです。亭主が女房と癒着してどこが悪い、というんです。そんなことをいうのは、真剣に町の仕事に取り組んでいない証拠だ。そのかわり設計者も女房だから浮気をするな、一生懸命やれ、ということをお願いです。これは普通はなかなかいえないことだと思うんです。でも、そこまでいわれるとこっちも応えますよね。ちょうど町の営繕課みたいなものですからね。それが今度の修景計画なんかにつながっているんですね。

修景計画も、最初から「修景計画」という言葉じゃないんです。そういうプロジェクトの名前はなかった。いろいろやっていくうちに、なんとなく、見学者が多いし、困ったなァ、なんとか名前をつけましようや、というので、それから地権者6人ぐらいで、町も入って、「町並修景計画事業」か何かにしましようかということですね。そういうものかもしれないですね。昔からの生活環境を整備するなんていうのは、ね。

**阪田** 私なんか、単に形がきれいに処理されているとかそういうことではなくて、いろいろな工夫を読み取れるわけです。たとえば、風紋のデザインにしても、車を整理する動線と重ねているとか、単に建築家が自分のやりたいとりにやっているというのではなくて、そこに要求されているものをベースにして、工夫しながらかたちが生み出されてきていることがよくわかる。そのへんがああ修景計画のほのぼのとしたあたたかさみたいなものにつながっていると思う。

**宮本** 1つ1つが仮縫いみたいなものでね。

**阪田** 古い倉があそこにはさまっているのも、それによって、全体にすごく時間の厚みなり奥行きを与えているところがありますね。ああいうのも1つの選択だから、デザインなわけですよ。そのへんがすばらしいと思った。

**宮本** 時間の変化とか日常生活の積み重ねみたいなつながりが、あれで証明できるんですよ。

**本誌** 栗の小径もいいですね。

**宮本** あれも、以前は泥んこの、水路と道が一緒になったようなはっきりしない道だったんですよ。あれもうまくなりましたね。ああいうことは、やってみるまでは町の人も半信半疑だったんです。町は、北斎館と高井鴻山記念館と、とにかくまっすぐにお客さんが入れるようにしたいということだった。だが、せっかくだから少し待ちましようということで、あんなふうになんとかもっていったんです。



いま、小布施の町の歩道を全部あれでつなげちゃおうとしているんです。不思議なものですね。

## ■もう東京では本当の木造はつukれない

**阪田** 宮本さんは木造をいろいろと公共建築に採用しようとなさっていますね。

**宮本** なかなかむずかしくてね。学校なんかでよく問題になるんですがね。木造がいいかどうかって……。木造でやりたいという人もいっぱいいるわけです。でも、木造では地震とか災害のときに火種になるというので不安感があるんですね。そうすると、僕は木造でやりたいなァと思っても、不安感のあるものというのは、弱いですよ。

**阪田** 火事でも、木造の建物は焼けおちて壊れるまでに相当時間がかかるらしいね。その間に有毒ガスが出るわけでもない。新建材でやってあるものは、一瞬に窒息して死んじゃうとか、軽量鉄骨だとグニャッとなっちゃうとかある。だから、木造の安全性が必ずしも劣るとはいい切れない面がある。そういう点でも、画一的な現行法規を鵜呑みにした型通りのものの見方というのではなくて、そのものの本質を見ていこうとする宮本さんの姿勢がうかがえるような気がします。

**宮本** 単なる内装材として使うのではなくて、なんか、安全のための1つの構造的なディテールみたいなかたちで使わざるを得ないというか、使いたくなるんですね。それでグーッと押していくわけです。カラマツ学校をつくったときも、意外な反響があった。ヒノキ学校をつくるとまた教

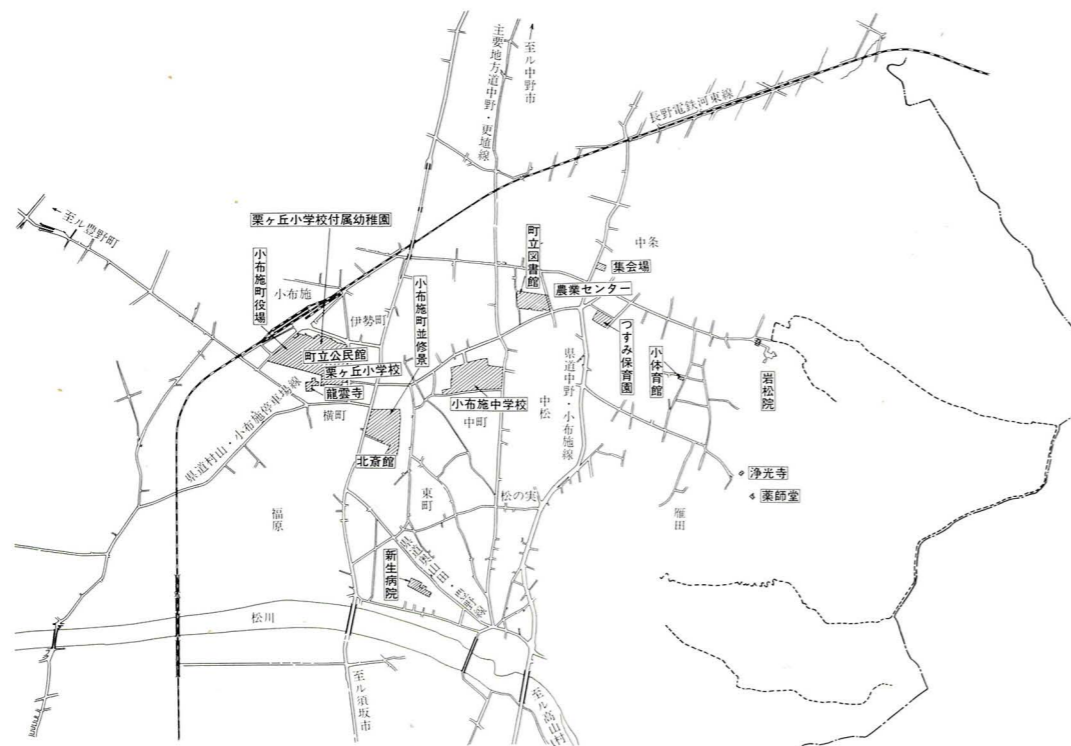


阪田 誠造氏

育関係の人に反響がある。いまの建築というのは、無意識のうちに画一的になっているんですよ。それと、この間東京で木造のちょっと小さい住宅をやっている、材木検査をやりたいといったら、東京の工務店さんが、材木検査って何ですかという。「ちょっと材木を見たい」といったら、「だって、材木って、規格品で、いいじゃないですか」という。驚きましたね。長野ではいまでも、材木検査といったら、ずーっと柱を並べて、番付を棟梁と一緒にふって、この床柱はこれで、これとこれが向かい合うからこの木目とか、このほうが合うからこっちとか決めて、1日かけて1本1本やるわけです。何本かハネてね。東京はそういうことをやらしてくれないんですよ。

**阪田** だいたい、そんなことをやれる人がいない。大工も、若い人はダメでしょう。本当の棟梁と一緒に行って、設計者のほうが木の見方を教えてもらわないと、どこを見たらいいかというのがわからないんじゃないですか。

**宮本** そうかもしれないですね。いつも材木検査で思うん



宮本忠長建築設計事務所の主な作品群(小布施町)

ですが、この木はちょっと育ちがよすぎるから心配だとか、いまはこのヒビは大したことないが、やがて割れてくるぞとか……。1本1本わからないのがいっぱいあるわけですよ。**阪田** それだけ材料もあるし、そういうことができる環境があるから。東京ではまず、本当の木造をつくる機会がなくなっているから、木造建築の設計なんてなかなかできないでしょう。まず、普通の構造事務所では、木造の計算はなかなかやってくれないんです。年とった方がいらっしやらない限りダメです。昔は木造でもものすごい時間をかけてやっているものね。新築するとなると、持ち山のなかから木を選んで、それも季節を選んで木を伐り出し、ここの柱はこれこれと時間をかけて……。

**宮本** ちょっと大きい農家だと5年ぐらいかけておりますよね。

**阪田** 昔の伝統的なものと、それを勉強する機会、触れる機会が、東京の設計者にはほとんどない。まだ地方には多少あるでしょうが、何年かたったらそこらへんも相当あやしくなる。東京だったら、具体的な仕事とは別に自分で研究するとか、どこかのまだ元気な腕のいい大工さんによく教えてもらうということをやらないと、勉強するチャンスがない。

**宮本** 特別にチャンスをつくらないと、ないでしょうね。地方にいとそういうチャンスがまだあるんです。だから、足元にいいものがあると思うんですがね。

## ■地方・大都市双方からの問題提起が刺激を呼ぶ

**本誌** 向こうへ行かれて何年ですか。

**宮本** 東京オリンピックのときですから、24年ですね。風土というところ非常につかみどころのない言葉ですが、やっぱり、そこに住んでいる人たち、建築主とか発注者からの条件とか声、要求なんていうのは、まさに風土の声かもしれませんよね。いつも、風土と建築物というのは、表面的なかたちであられてくる。

**阪田** それはありますよ。それと、実際にそこに長年自分

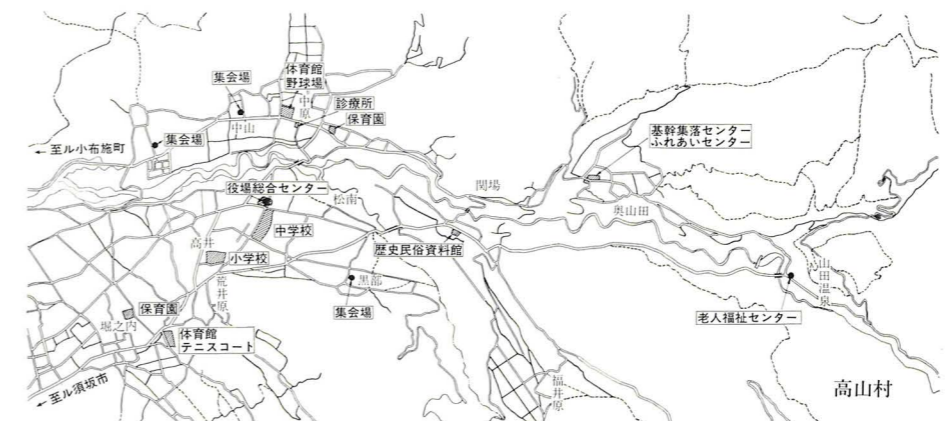
自身も住んで、いろいろな人との日常的な交流などを持ったなかから考えていく建築と、いわゆる、情報として得たものをもとにしてつくっていく建築とでは自ずと違いが出てくる。建築家が自らも生活を共有できるような関係にある場合と、まったくそういうことと関係なくて外部からきて何かをやる場合の違いというのは、どうしてもあると思います。宮本さんみたいな人が全国にたくさんいると、いろんな個性の違いというか、その地域の違いがもっと表面に出てくるだろうと思う。

**宮本** それはある意味で理想のかたちかもしれないですよ。でも、地方にいて仕事をしておりますと、地方の建築家の皆さんが、ほとんど、東京を見ているんですよ。建築雑誌とかそういうもので……。たとえば、いま、ポスト・モダンなんてあるでしょう。そうするとすぐポスト・モダンが入ってくるんですよ。そういうものに対して非常に敏感なところがあるんですね。敏感すぎるぐらいに敏感ですね。だから、どうしても焦点が中央とかそういうほうにいくんですよ。そして、肝心の足元が見えないんですよ。

**阪田** 足元を見ないのはべつに地方とは限らないですよ。東京でもそういうのはいっぱいあります。1つはスケールの問題があって、そういう点では、小布施町は、ヒューマンスケールの点でも大変いいスケールですね。あれの10倍なんていうとまた手に負えなくなるしね。

**宮本** 僕も、10倍なんていったら戦意喪失ですよ。うちあたりは、たまたま、人数的に30名弱ぐらいでしょう。だから、長野県ぐらいで仕事をさせてもらうのがちょうどいいんですね。1つは人間の能力の範囲というのがありますよね。世界を股にかける人もあるかもしれないが、僕はダメです。

**阪田** 僕からは、もうちょっと宮本さんの発想とか、建築のつくり方とかを、東京においても可能だという実績を現実の仕事で示していただきたいと希望しています。私たち東京の建築家は、日本全国で仕事をする機会があり、一方、地方に密着して仕事をしている建築家を、その地域だけに閉じこめて見ているのは、どうもおかしいのではない



宮本忠長建築設計事務所の主な作品群(高山村)



か。地方から問題を掘り起こして、大都市の建築への問題提起がなされる。一方、大都市からの問題提起もあり、双方の交流が活性化や刺激になると思います。それが議論のレベルだけでなく、実際の作品を通してなされることが望ましい。今のところ長野の作品しか見られないのが残念ですが、小布施町の修景計画事業なんか、僕自身にとってたいへん刺激を得るところがありますね。

**宮本** 僕はそんな力はないからそこまではなかなかかかないと思いますがね。

**阪田** 僕はそういうふうを受け取っているわけですよ。20年なりの重みがあって、その成果が小布施町とかに具体的にあらわれているような気がする。とにかく、小布施町が一番鮮烈にそういうものを感じさせる作品だといえますね。長野市立博物館の場合は、デザインはそれなりの特色があるんですが、小布施町のほうはもっと、なかをいろいろ見ていくと非常におもしろい部分がたくさん見出されるように思います。

**宮本** そういう意味では、エネルギーの使い方が違いましたね。いま、南牧村（野辺山高原）でも、小布施と同じように、20年ぐらい全部公共施設をやらしてもらっているんですが、先日、竣工式が1つありましてね。初めてくるようなお客さんがいらしたのですが、皆さんが、いま、1建築家が全部やっているというのは珍しいというんです。はじめは、建物がみんなわりと揃っていることが不思議だったが、それでよくわかりました、という。どうしても、1



本誌・小堀美津子

人の建築家がやればディテールなども揃いますよね。地方でやっている人たちも、非常に優秀な人がいらっしやると思うんです。ところが、1市町村というか、1建築家がずっとかかわりを持つという人がどうもいまは少ないんじゃないですかね。

**阪田** それは1つの幸運かもしれないが、やはり、辛抱強く発注者の、あるいは社会の信頼に応じてやっていくという……。建築家の姿勢もあっちへいたりこっちへいたりするようなことでは、そういう信頼をなかなか得られない。いくつかの出会いの経過のなかから、本当に新しいものをつくっていく人と人の結びつきを大切に育てていくように考えていかないといけないのでしょうかね。

### ■施主の信頼を得るには“裸の姿勢”でぶつかる

**宮本** 最近、設計報酬が折り合わなくて断られるケースというのが、半分ぐらいなんです。残り半分の方は、基準に見合っただいたいやって下さるわけです。

**阪田** お役所で？

**宮本** 役所ではちょっとダメですが、民間で。民間のそういう人たちはわれわれの仕事に対しても非常に理解がありますよね。たとえば、この間もある幼稚園で、私に頼むんだから設計料は私のいう通りで覚悟していますとか、ね。覚悟して、というのはちょっと困るんだけど(笑)。それから、工事費も若干高くなるでしょう。設計期間も当然少し長くなるでしょう。でも、幼稚園の開園の時期があるから、せめて1年間ぐらいでできませんかとか、そういうふうにして頼まれるケースというのはありがたいですよ。そういうケースが、民間では全体の半分ぐらいです。残りの半分は、設計料の話を知ると、「結構でございます」といって、それっきりこない(笑)。それでちゃんとほかでやっているわけですよ。ほかで聞くと、話にならないぐらい低い設計料なわけです。やっぱり、建築というのはそのへんから、責任を持たせてもらうにはこのくらいはどうしてもかかりますよ、ということでやらなくちゃいけないと思うんです

よね。

**阪田** 建築家がいうよりも、社会のほうで、もうちょっと厳しく見分けをつけるような……。たとえば、本当に同じ成果で、まったく同じ真面目にやれるのであれば、たしかに安いほうがいいかもしれないが、そこでいい加減にやっているとなると、補修にしょっちゅうお金がかかるとか、非常に使いにくいとか、魅力がないとか、必ずシワ寄せをくう。そのへんについて、建築に対する社会の関心がなさすぎますよね。設計料なんていうのは、誰がやっても同じモノしかできないというくらいの認識では、安いほうがいいみたいな話になってしまう。

**宮本** この間、建築士会の資料でちょっと見たんですが、昭和40年に1級建築士の数が5万人ぐらいなんです。60年にはそれが4倍の20万人です。建築の確認物件を調べると、昭和40年に比べて60年は1.6倍ぐらいしか増えていないんです。建築士の数が1級だけで4倍にも増えて、確認物件数が1.6倍ですから、相当過剰というか、仕事に対してバランスがとれていないという感じもしますよね。

**阪田** それと、非常に時間をかけて作り出したものが同列に見られたりする。

**宮本** そうそう、一緒になっちゃう。

**阪田** 逆にいうと、そういう料率式だと、ただ図面だけを短期間につくればいい、という要求もなきにしもあらずでしょう。そういう部分に対しても同じものを見方をするのもおかしい。それと、建築家のほうも非常にむずかしいことをいい過ぎちゃって、一般の人には何のことかわからないようなことをいっていたりする。

**宮本** そのへんの対話がいままで全然ないでしょう。それと、とにかく、施主に対しては、とことん丁寧というか、とことん話し合うというか、こっちも裸になった姿勢がないとダメですね。

**阪田** それがないと信頼を得られないし、信頼を得てくる

と設計料などもわかってくると思うんです。

**宮本** 信頼という問題で、僕は、そのへんがどうしてなおらないのかと思うのは、旧建築家協会のときに、設計事務所の設計監理業務のなかに、施工側から見た見積書の工事費の検討とかチェックとかいう項目があるでしょう。一方で、実施設計業務とか基本設計とかがあって、そのなかに工事費概算書の作成というのがあるんだね。工事費内訳明細書の作成は、建築主からの要求があったら、またはそれは特別のフィーをいただいたやりなさい、とある。これは僕はまったくの逃げ道だと思うんです。というのは、田舎にいてやっていて、僕の場合は、内訳明細書を全部つくるわけですよ。

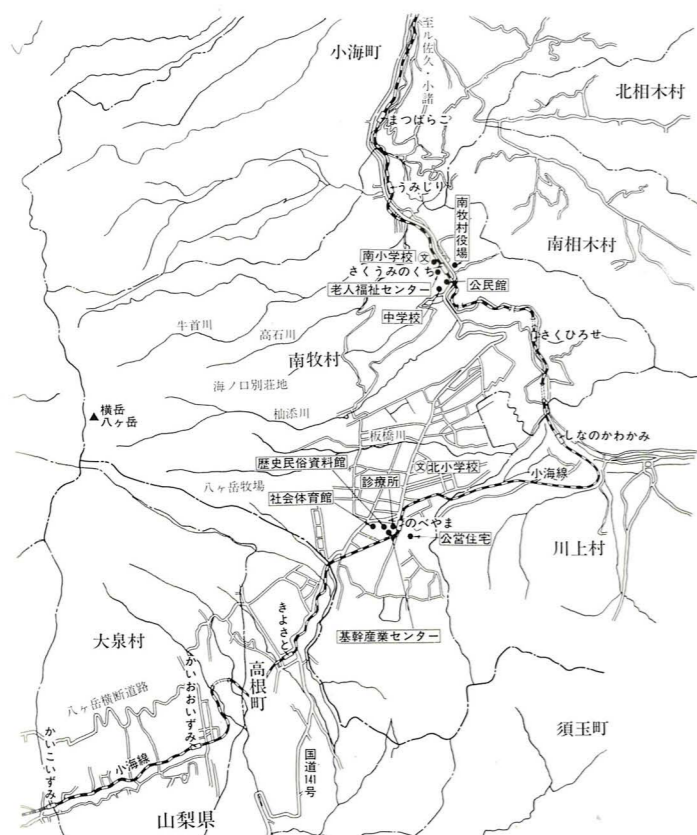
**阪田** われわれだってつくりましますよ。

**宮本** ところが、なかに、そういうふうを書いてあるからつくりたくない事務所があるわけね。

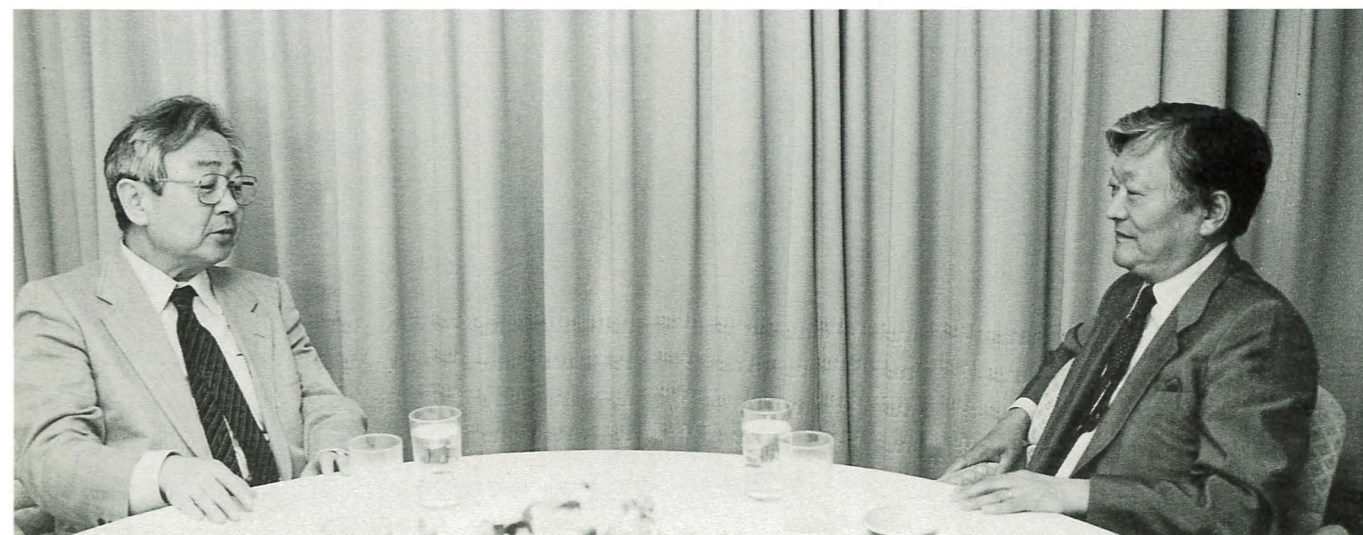
**阪田** 筋論でそういうのがあるという場合もありますかね。

**宮本** こういうふうに決まっているからつくりたくない、という人がいるらしいんですよ。そうすると、自分のところで積算してなくて、ゼネコンさんの出した見積りをチェックしろなんていったって、数量なんかわかりませんよね。それでも、チェックしましたなんていう。そういうことを決めておくのでは、非現実的だと思うんです。昔は、設計書というのは全部捨てるのが当たり前だったので、それをいまうちではやっているわけです。

**阪田** それも、設計に対する見方が非常に画一的だったわけですね。何か解答式があって、何も考えずに即刻図面をつくるだけのおさめられるようなものであっても、反対にもものすごく時間をかけてやっても、工事費に対する料率算定の設計報酬の考え方は非常に一律主義のものでしょう。そういうのにたまたま積算書が入っていないとか……。それはこっちからのいい分であって、本来、契約というのは、両方で話し合っ、こういうことをやってほしい、それじ



宮本忠長建築設計事務所の主な作品群(南牧村)





ゃこのお金で、それで結構です、という話になるべきです。1つの基準のみですべてを律するというのは無理というものです。

## ■町づくりの成功法は“土地の精霊”を活かすこと

**宮本** 私は二十何年小布施に取り組んで一生懸命やってきた。町並修景計画にしてもそれなりの成果で、自分にとっては意外に認められているというか、意外な効果が出たという気がしているんです。ただ、逆に、小布施のなかでもそういうことの価値観が全然わからない人が一方にいるわけですよ。そういう人たちと会ってみると、その人たちはいま自分のやっていることが一番いいんだと信じきっているわけだから、そういう人たちとの関係をこれからどうしていくかというのはむしろ難しいところ。僕なんか、わかる人とだけやっていくよりしかたないと思っている。

**阪田** 何もかも自分のほうで合わせるわけにはいかないでしょうから、その選択はあって当然でしょうね。

**宮本** 男と女の関係みたいなもので、やっぱり、嫌いだったら嫌いでしょうがないぐらいに思っていないとダメですね。僕なんか、地方にいと、一方で情報不足というものもあるんですよ。僕の場合は東京と長野をしょっちゅう往復しているでしょう。僕は週末に東京へ出てくるんですが、そうすると都会の人が軽井沢へいったようなホッとした気持があるんです。不思議と雑踏のなかにそれがあるんですよ。雑踏のなかに1つの現代の文化があるんですよ。そして、帰ってきて1つ1つ確かめるんです。そう、こういうことがあったゾなんてね。おそらく、長野なら長野にずーっと土着的にいたら、東京へくるのが億劫になりますね。ダメだと思います。

**阪田** それだけだとたしかにそうでしょうね。ある意味では現代と呼吸をしていないと……。古いものを保存をしているわけじゃないでしょうからね。

**宮本** たとえば、この年をして日曜日に都内の渋谷あたりの盛り場へ行ってみると、10年ぐらい前は、そこに1つのカルチャーがあるという気がして、新鮮でした。ところが、最近の盛り場のカルチャーは魅力がありません。ダメですね。

**阪田** 現代のある一面というのが、東京では一番活きのよいものが詰め込まれているという面があるし……。

**宮本** 小布施のことをいうと、最近、見学者の8割は商工連合会の団体です。自治体が15%ぐらいです。残りの5%ぐらいが建築の設計をする人たちです。いままでいろんな人を案内していて、建設業協会の人というのはゼロです。それから、こっちも講演に引っ張り出されて50以上の都市

に行ったんですが、行くと必ず講演の前に見てほしいとか、あとでちょっと周りを見てほしいとかいわれますでしょう。見ると、小布施が成功したというか、うまくいっているのは、あの町のなかに精霊みたいなものがさまよっているような気がするんです。どんな町でも、そういうところにうまく手をつければ立派な町になるような気がするんですがね。

**阪田** それはそうだね。何も無いところには……。

**宮本** それが歴史、文化かもしれない。

**阪田** それと、形だけを真似るのではなくて、本当につくり方そのものを……。

**宮本** そうなんです。家と倉とか、倉と塀とか、いろんなものがあるでしょう。地域によって違うんです。

**阪田** その人たちと一緒に長年かかって、そのなかでまとめていくというのは大変でしょう。

**宮本** 大変ですよ。ある意味で親しいからできるのかもしれないしね。親しいというのは、そういう身近なつき合いだから、相手のふところのどのくらいあるかぐらいまで、住宅なんかをやっているとわかるわけですよ。「宮本さん、悪いけどこれしかないんだ」と貯金通帳もみんな見せてくれる(笑)。それは真剣味が違いますよ。ですから、小布施であれだけやっても総工事費が5億いかないんですよ。

**阪田** 5億を何年もかかってやっでは大変だ。

**宮本** 10年……(笑)。小布施はありがたいことに、設計料でも1つ1つ契約して、みんなそのとおりにもらえたんです。ただ、今度は別の意味で、時間的にはうんと取られちゃうでしょう、ほかの仕事ができない。

**阪田** いえないような大変なことがいっぱいあったんだろうと思いますよ。

**宮本** でも、いまとなればみんな楽しくてね。まだ、歩道なども続いているので、関係者がいまでも月に一度は集まる。

**本誌** 地元の方とあまり密着しすぎると、余分な経費がかかりますでしょう。親族みたいになっちゃうから……。

**宮本** そうです。領収書のないような経費がかかりますよ。そのかわり、私の事務所で、私がウドンをつくったり、サラダやカレーライスをつくるんですよ。それで、きょうは接待だといっている(笑)。それがまた地域なんでしょうけどね。

**本誌** そういう飾り気のない地元の人々との交流があるからこそ、さきほど阪田さんもおっしゃったように、宮本さんの作品には、何かほのぼのとした暖かさが滲み出てくるわけですね。本日はお忙しいところを時間をさいて戴き、どうもありがとうございました。

(まとめ=本誌編集部)